伝統的家屋からみた宇治の文化的景観

はじめに　文化遺産部景観研究室では、平成21年度に京都府宇治市からの受託調査研究として、都市域の文化的景観として初めて重要文化的景観に選定された「宇治の文化的景観」の中心地域である中宇治地区を対象に、現存する伝統的建造物の文化的景観としての価値評価と、今後の文化的景観の整備活用に関する計画策定を目的として調査を実施した。１次調査では、地区内に残る伝統的家屋の残存状況、構造形式、建築年代などの悉皆調査、２次調査では個別物件の実測、来歴・敷地利用等の聴取などの詳細調査をおこなった。また、建造物調査と併せて、中宇治地区の立地特性となる自然地形、現在までの都市空間の形成過程、主要産業である茶業に関する調査をおこなった。本稿ではそれらの概要を報告する。

中宇治地区の立地特性　中宇治地区は、宇治川が山間部から京都盆地に流れ出す谷口左岸の扇状地上に立地しており、砂礫層の土壌に覆われている一方、比較的水位が高く水源豊かな地域である。こうした中宇治地区の立地特性によって、平安時代には、宇治川と朝日山、仏徳山の緑に囲まれた景勝の地を活かして、藤原氏によって別業地が形成された。また、茶の栽培に適した砂礫層の水はけの良い地質のため、中世以降の宇治茶産地としての発展にも影響を与えたと考えられる。

都市空間の変遷　中宇治地区は、藤原氏の別業地をその起原とするが、これまでの発掘調査の成果によると、平安期の中宇治では、東西、南北にそれぞれ延びる本町通りや県通りを基軸に格子状街区が形成されたことがあきらかとなっている。

中世になると、藤原氏の退転と共に別業地は廃絶するが、鎌倉期には、茶の栽培方法が伝播され、室町期頃から宇治茶業は大きく成長し在郷町として発展を遂げた。こうした中、南北方向の既存の格子状街区を、南西方向に貫く宇治橋通りが新設され、近世前期には新たな都市の中心軸として、宇治橋通り沿いに町家が立ち並び市街地が発展していった。また、近世中期の作成とされる「宇治郷総絵図」には、宇治郷代官であった上林家をはじめとする茶師や一般の民家まで、表家、門、塀などの門構え、敷地割りが一つ一つ詳細に描かれており、宇治橋通り沿いには、塀を巡らせた大規模敷地の茶師屋敷地が集中していることがわかる。また、宇治橋通りや県通り沿いには密集して家屋が並んでいるいっぽうで、本町通り沿いには空地が目立ち街区内部と本町に茶畑や水田が広がっていた。

近代になると、一部を除き茶師の大半は転、廃業し、茶師屋敷地は細分化され、茶の卸小売店や生活関連の小売店が並ぶ商店街が形成された。明治20年代には家屋は宇治橋通りや県通りなどの主要な通り沿いに建ち並ぶのみで、街区内部の空間はほとんどが農地として利用されており、昭和30年代まで農地としての利用が続く。昭和40年代から宇治市街地のスプロール化により、街区内部の茶畑の宅地化が進み、現在では街区内の茶畑は一区画を残すのみである。

伝統的家屋の残存状況　現地調査により、中宇治地区における近世から昭和30年までの間に建てられた伝統的家屋301件を確認することができた（図65）。伝統的家屋の分布状況とその特質について通り別に述べると、宇治橋通りでは、茶業が盛行した江戸期の茶師の長屋門や、明治期の茶業関連町家（図66）、近代以降の商店街としての発展を象徴する昭和初期に建てられた鉄筋コンクリート造の旧百貨店（図67）など、江戸時代から明治時代に建てられた建物が宇治橋通り沿いに集中している。県通りでは、大正から昭和初期の伝統家屋の分布が多く、近代以降の通りの発展を反映している。宇治橋付近と県神社付近に、茶問屋などの茶業関連町家が見られるが、多くは昭和初期の町家住宅であり、茶業関連業種と居住地が混在している。本町通りは、茶農家の家屋や茶園が点在し、茶生産地としての特色を有している。

伝統的家屋と敷地利用の特徴　現在も中宇治地区に数多く残る茶業関連町家では、敷地の奥行きが30間に及ぶほどの深さを持ち、近世の絵図や明治中期の地籍図と比較すると、近世の茶師屋敷の大区画の地割が近代に入り、奥行方向をそのままに短冊形に細分化され、現在に至る。このような敷地の特徴から、正面に表屋、奥行方向に延びる土間に沿って製茶関連施設を配し、敷地全体を利用して、茶の製造、貯蔵、販売等をおこなっている。特に、明治中期以降に開発された煉瓦造りの乾燥炉は、長い所では８間にもわたる長大な乾燥炉が設けられている。更には、製茶関連施設への茶葉や茶製品の搬出入は敷地正

面からおこなうのだが、表家の正面扉口が、片開き戸や両開き戸となり大開口を確保できるよう工夫し、庇を極端に深くし正面水路をまたぐ橋を間口一杯に拡げることで庇下の空間を搬出入の際の荷卸空間として利用している。こうした敷地奥に展開する土地利用と茶業の関係は、建築の表構えにも色濃く表れており、中宇治地区の特徴といえる。

調査のまとめ　本調査の成果として、①中宇治地区における伝統的建造物の残存状況を把握し、その建築類型と分布特性を捉えられたこと、②重層的に形成された都市構造と茶業とが結びついた敷地利用が具体的に明らかになったこと、③建物の表構えや土間の在り方などの構造に、中宇治独自の敷地形状と茶業の影響を読み取ることができたことが挙げられる。

よって、伝統的家屋からみた宇治の文化的景観の特質は、宇治川に代表される自然地形を基層として、平安期の別業地の格子状街区と、中世以降に宇治橋通り沿いに発展した茶師屋敷の町並み、近代以降の商店街の発展と住宅地化など、同じ地区内で時代の異なる都市形成過程が重層することで中宇治独自の都市構造が維持されており、都市形成過程の各時代を示す伝統的家屋が、宇治の都市構造や茶業を中心とする生業と密接に関連することで独自の土地利用形態が維持されている点であると考える。

今後の整備・活用　以上までの調査成果を踏まえ、文化的景観保護制度を用いた宇治の文化的景観の整備・活用方針としては、中宇治の重層的都市形態と茶業によって形成された個々の伝統的家屋を可能な限り保存・活用するのみならず、中宇治地区の茶業に関わる街路網や敷地割などの都市構造を継承することが重要である。そのためには伝統的家屋の保存だけでなく、その他の建造物等の景観計画による規制とデザインガイドライン等による積極的な景観形成のための誘導を図ることが求められる。その際には、単一様式への収斂や伝統的形態の模倣ではなく、様々な時代にわたる建造物が織りなす景観の保存・整備を目指す必要があるだろう。また、こうしたハードの景観整備が、間接的であれ、宇治茶業および宇治の地域社会の持続的な発展に寄与するソフト支援へとつながることこそ、宇治の文化的景観保護の目指すべき目標といえよう。

（松本将一郎・恵谷浩子）

図65　中宇治地区の伝統的家屋分布図（一部拡大）

図66　中宇治の伝統的な茶業関連町家

図67　宇治の近代化を象徴するRC造の旧百貨店